

〔特集：子どもの育成と看護の役割〕

4. 地域における子育て支援ネットワーク作りと看護の役割

東京都母子保健サービスセンター

篠崎 育子

1 はじめに

最近の母子保健活動は、疾病の早期発見・早期治療ということが目的ではなく、育児不安の解消等すべての子どもの健全育成が目的となっている。おのずとその対象も、健康診査等で援助の必要な親子を発見し関わっていくというような一部の親子が対象ではなく、すべての親子が対象である。そのため活動の方法も個別の相談活動に加え、地域での仲間作り等に重点が置かれている。個々の親子をグループ化し、孤立感を解消すること、そしてその中で親が育児の楽しさを感じることに、特に育児の大半を担う母親にとっては大きな満足感につながっていく。このような当事者同士のネットワーク作りは、重要な母子保健活動のひとつとなっている。

また、最近の育児支援は保健、福祉、医療、社会教育、学校保健等、地域の中の様々な場で取り込まれている。一方、当事者にとって育児に関する情報は、情報化社会の中で公的機関のみならず、世界中から得られる状況にある。これらの情報を整理し、自分にあつた情報を取捨選択できれば問題はないが、情報の氾濫がかえって育児を混乱させる原因になっているのも現実である。このような状況の中で、地域の関係機関同士がネットワークを組み、適切な対応をすること、地域の問題点を共有することは非常に重要である。

このように“子育て支援ネットワーク”を「当事者同士のネットワーク」と「関係機関のネットワーク」の二つの側面から捉え、そこに関わる看護職の役割について考える。

2 子育て支援ネットワーク作りと保健婦の役割

地域で活躍する看護職はさまざまあるが、行政の中に位置付けられ、年代を問わず地域の住民に接することのできる場を持っており、地域住民の健康を守るという幅広い活動のできる保健婦がこれらのネットワーク作りを担えるのではないかと考え、ここでは前述の二つの側面から保健婦の役割について延べたい。

(1) 当事者同士のネットワーク作りと保健婦の役割 ①住民のニーズと保健婦の気づき

保健所、市町村では、母親学級や乳幼児健診などを事業として行っており、その相談の中で、ごく日常的なことで悩む育児不安や子育て仲間がいないこと等が目立つようになってきた。そのようなことから、今までのように健診の個別相談の中で保健婦と母親の1対1の相談だけでは解決ができないことに気づいた。そこで、保健婦が広報に「子育てグループ作りのお手伝いをします。」という内容の記事を載せたところ、たくさんの母親から反響が寄せられ、母親達のニーズを再確認する結果となった。その後、それぞれ担当する地区で母親達に声をかけ、保健所・市町村の施設を場として提供したり、地域の集会所等に出かけて行ったりして市内の子育てグループが作られていった。

この時期の保健婦の役割は、母親達の主訴を単に健診の場だけの問題と捉えず、地域の子育ての新たな問題として捉え、それまでグループといえは障害児の親のグループ作りという活動だけであつたもの

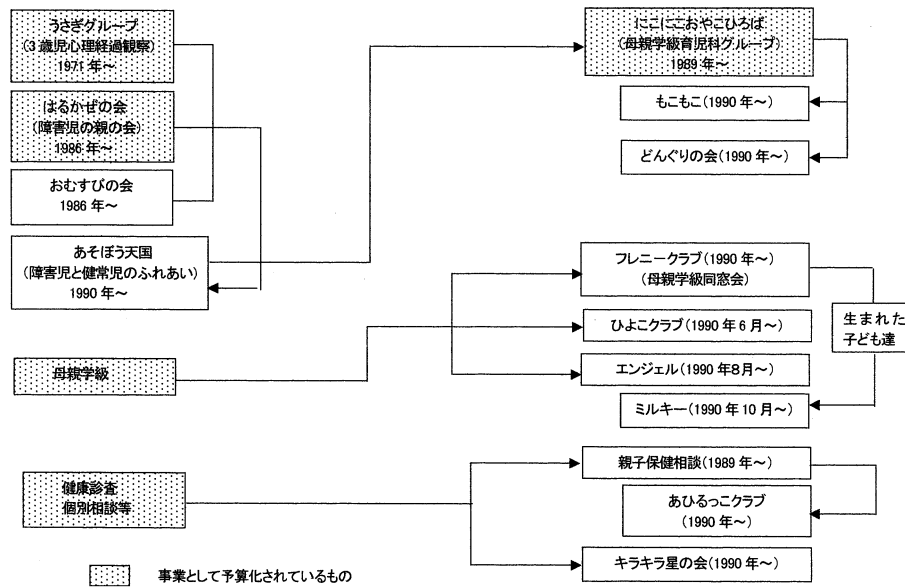


図1. M市の子育てグループの成り立ち

を、一般の子育てにも広げていったことが大きかったと思われる。これは、乳幼児健診の受診率が8～9割であり地域のほとんどの母親と接することのできる保健婦だからこそ気づけたニーズではないだろうか。

②子育てグループ活動の充実とノーマライゼーション

グループに来る母親達によく目を向けると、文章や絵を書くのが好き等の特技や結婚前は保育士とか音楽の先生だった等がわかり、それらを考慮しグループでの役割を一緒に考えていくと母親達が生き生きとし、グループだよりを作ったりと活動が活性化してくる。単なる「○○ちゃんのお母さん」ではなく、グループでの存在意義が社会の中での存在としての喜びに変わるのではないだろうか。グループだよりや母親の話を聞きグループに興味を持つ父親がいると、クリスマス会は日曜日に父親も参加してなどと活動の幅が更に広がっていった。

また、自分達のグループを運営していると他にどんなグループがあるのか、どんな活動をしているのか等にも興味が出てきて、そんな時に保健婦が情報を提供するとグループ同士のつながりに発展していった。この流れの中で、障害児を持つ親の会と地域の育児グループが交流する遊びのグループができた

(図1参照)。

このように、1人1人の個性を引き出したり、グループに溶け込めなかつたり逆に不安になってしまったりする人への個別の対応を担っているのが保健婦である。また、障害の有無を問わず地域の中で一緒に育っていこうというノーマライゼーションの視点での関わり方ができるのも保健婦の役割ではないかと考える。

③子育てに関するニーズと行政の施策

グループの中での母親同士、またグループ同士での情報交換を通して、子育てに関する情報が集まったり、行政への要望等が一致したりと、もっとその情報をたくさんの人達と共有したいという要望がでてきた。そこで、保健婦は交流会の発足を提案し、市内のたくさんの育児グループ同士が集まり、活動の情報を交換したり、自分たちの住む町の子育ての問題点について話し合ったりする「子育てグループ交流会」が発足し、行政の関係機関も参加しての第1回目が開催された(図2参照)。

ここで保健婦が果たした役割は、交流会の発足について保健婦と関わりが深かったいくつかのグループに働きかけ役割分担を行った。すなわち会場の提供と各行政関係機関への呼びかけは保健所が、市内の育児グループへの参加呼びかけは中心となるグ

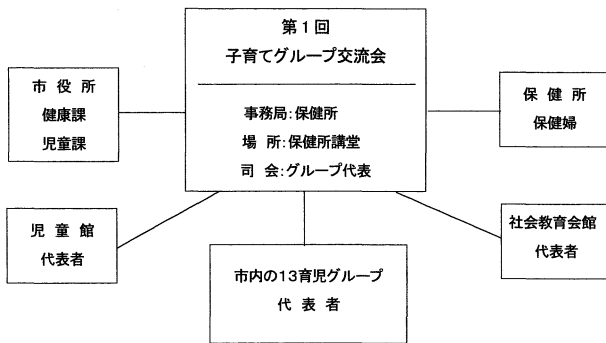


図2. 子育てグループ交流会

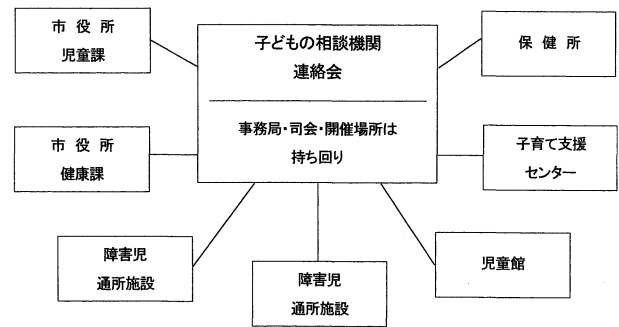


図3. 子どもの相談機関連絡会

ループの母親達が行うこと、そして当日の進行についても保健婦が全面的にバックアップするから母親達が司会進行を行うということであった。このように母親達のニーズを行政の施策に活かしていくこと、自分たちの町の問題を共有し一緒に解決していくというヘルスプロモーションの視点からの活動を地域の中で実践していくことも保健婦の重要な役割といえる。

(2) 関係機関のネットワーク作りと保健婦の役割

あるケースに複数の機関や人が関わる場合、それぞれの意見が異なるとその相手は一樣にとまどいや不安を感じ、かえって不安を増強させることとなる。それぞれの機関の援助が効果的になされるためには、各関係機関が同じ方向性を持って援助していかなければならない。また、最近問題となっている虐待への対応など、問題が深刻であったり、緊急性を要する場合は1カ所の機関だけでは対応できない。このように抱える問題が複雑化、多様化しており、単一の専門職や機関・施設で自己完結的に解決できない問題が多くなってきている。そのためにネットワークは必要不可欠なものといえる。

一方、子どもに関する相談機関は、保健・福祉・社会教育等の行政機関を始め、病院や地域の助産婦等たくさんの機関・人が関わっている。これらの機関・人が地域の子育ての問題点や親たちのニーズ等を共有し、それぞれの役割を確認することにより、相談にきた親たちを混乱させない、また援助の必要な親

子にサービスを提供するための連携が必要である。

そのような視点から保健婦がまず行政の関係機関に呼びかけ、関係機関のネットワークとして「子どもの相談機関連絡会」を発足させた(図3参照)。この連絡会により、どこでどのような相談がされているのかがわかり、相談にきた親子に必要な相談機関を紹介することが可能となる。また、前述の子育てグループ交流会等からあがってきた問題を複数の行政機関が共有し、一緒に考えることができる。

ここでの保健婦の役割は、地域の子育てをしている住民のニーズを一番把握しやすい立場にいたり、保健所または市町村という母子保健活動を担う中心機関であることから各関係機関への呼びかけがしやすいということであろう。

3 今後の課題

地域の中の連携を推進していくために、まずは地域の中の看護職同士のより一層の連携をすすめていくことが必要となる。看護も専門分化していくなかで相互の理解と情報交換が重要と思われる。

また、子育てを地域の問題として捉えるならば、子育てをしている当事者、子どもに関わる機関だけの連携だけにとどまらず、父親への支援、高齢者やボランティアの活用、学校教育との連携等も今後広げていかなければならない。